東日本大震災の津波被害における 神社の祭神とその空間的配置に関する研究

高田 知紀¹・梅津 喜美夫²・桑子 敏雄³

¹学生会員 東京工業大学大学院 社会理工学研究科 (〒152-8550 東京都目黒区大岡山2-12-1 W9-25)
E-mail:t-takada@valdes.titech.ac.jp

²学生会員 東京工業大学大学院 社会理工学研究科 (〒152-8550 東京都目黒区大岡山2-12-1 W9-25)
E-mail:umetsu13@valdes.titech.ac.jp

³正会員 東京工業大学大学院教授 社会理工学研究科 (〒152-8550 東京都目黒区大岡山2-12-1 W9-25)
E-mail:kuwako@valdes.titech.ac.jp

東日本大震災では、多くの神社が津波被害を免れたことが指摘されている。本研究では、日本の神社に祀られる祭神の多様性は、人びとの関心に応じた差異化の結果であるという仮説から、宮城県沿岸部の神社についてその祭神と空間的配置に着目しながら被害調査を行った。祭神については特に、ヤマタノオロチ退治で知られるスサノオノミコトに着目した。スサノオは無病息災の神として祀られることから、洪水や津波といった自然災害時にも大きな役割を果たすと考えられる。また、地域の治水上の要所に鎮座していることが多い。東北での調査から、スサノオを祀った神社、またスサノオがルーツであると考えられる熊野神社は、そのほとんどが津波被害を免れていることを明らかにした。この結果は、地域の歴史や文化をふまえたリスク・マネジメントのあり方について重要な知見を提供する。

Key Words : risk management, shrine, tsunami, enshrined deity, Susanoh-no-mikoto

1. はじめに

東日本大震災は、未曾有の自然災害として甚大な被害をもたらした。特に地震後に発生した津波による被害は極めて深刻であり、日本における自然災害への対応のあり方が根幹的に問い直されている。

一方で、1,000年以上の長期的視野に立ってわが国の災害を考えた時、巨大地震、巨大津波が起こりうるということはすでに歴史が示していたし、地域の歴史はこうした災害をふまえて資源管理、環境管理、地域社会の維持に努めてきたと考えられる。

本研究の目的は、地域の「空間の構造」と「空間の履歴」に着目することで、長期的な時間スケールをもった自然災害のリスク・マネジメント方策についてのひとつの方向性を示すことである。特に重要なのは「空間の履歴」である。人間が生きる空間は、歴史的な出来事によって様々な意味が付与されている。また「歴史」が過去に属するのに対して、「履歴」は現在に属し未来に開かれている¹⁾。「空間の履歴」の掘り起こしでは、生態系や文化・活動・人びとの生活などを含んだ地域空間の歴史性を基礎として、それらが現在においてどのように関

係しているのかを調べ、また、今後どうなっていくのかを考えることが重要な作業となる。本研究では、将来的なリスク・マネジメントのあり方について検討するために、その地域の「空間の履歴」に着目する。

リスク・マネジメントに向けて地域空間の構造を把握するうえで重要なのは、山、川、海といった地形的関係である²⁾。特に尾や江（くぼんだ土地）といった治水上および利水上ポイントとなる場所である。こうした空間の主要部分は地域が共同で管理するという歴史をもっていることが多い。古来、日本人はそのような地域共同管理空間をひとつの軸として、コミュニティのマネジメントを実践してきた。こうした共同管理空間は、とくに自然災害との関係でその重要性が目される。

本研究で「空間の履歴」を具体的に分析するうえでは、伝統的地域社会のなかで、祭事・人びとの間での交流の場・リスク時の避難場所といった多様な役割を果たしてきた神社の空間的配置とその祭神に着目し、東日本大震災発生時に大津波が襲来した宮城県沿岸部において、神社の被災状況を調査した。その結果として、スサノオノミコトを祀る神社、熊野系神社、八幡系神社の多くが津波被害を免れていることを示した。またその反対に、ア

マテラスを祀った神社、稲荷系神社はその多くが被災していることを明らかにした。

3.11以降、津波災害と神社の配置に着目した調査研究を宇多ら³⁾が実施している。また、震災後に「東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)神社情報特設ページ⁴⁾」が開設され、被災地の神社に関連する情報がインターネット上で発信されている。

一方で、神社の地域社会内における役割、あるいは過去の人びとがどのようなインタレストをもってその神社を建立したのかという意味生成過程に着目した津波被害関連の研究はまだ実践されていない。本研究では上述の調査・研究を参考にしながら、さらに、日本の神社に祀られる祭神の多様性は人びとの関心に応じた差異化の結果であるという仮説から、伝統的地域社会が抱いていた地域空間へのインタレストをふまえたリスク・マネジメントの方向性を探るために、神社の祭神に着目し考察を行った。

2. 津波被害と神社の配置に関する調査の実施

日本各地の神社は、明治の廃仏毀釈、神社合祀によって相当数が減ったものの、現存する神社の多くは近代的コミュニティの成立以前からそこにあったと考えられる。つまり、1,000年以上のタイムスパンでの地域空間の歴史的経緯を内包している。神社は、数百年に一度の確率で発生する大規模自然災害に遭遇しながらも現在にその姿をとどめている。現に、今回の津波と同規模のものが貞観年間や慶長年間にやってきたという記録が残っていると考えられる神社がいくつもある。

そこで本章では、津波被害と神社の空間的配置の関係についての調査結果を示す。本研究では、地図上であらかじめ津波の浸水域と神社の位置を把握したうえで、その後、重要と考えられる箇所について重点的に現地調査を行った。地図は、浸水範囲に関しては日本地理学会災害対応本部津波被災マップ作成チームが作成した「2011年3月11日東北地方太平洋沖地震に伴う津波被災マップ⁵⁾」(以下、「津波被災マップ」とする))を用いた。「津波被災マップ」では、赤いエリアは津波の遡上範囲、また青塗りのエリアは家屋の多くが流される被害を受けた範囲を示す。また、上述の日本地理学会による津波被災マップでは神社の配置が不明確であったため、神社については昭文社が2011年7月に発行した「東日本大震災復興支援地図⁶⁾」(以下、「復興支援地図」とする))を用いて位置を抽出した。

まず、復興支援地図から津波浸水範囲周辺の神社をすべて抽出し、さらにそれらの神社を津波被災マップの上

にプロットした。本研究で調査を実施した宮城県沿岸部全域(岩手県・大船渡市、陸前高田市を含む)で、神社は合計215カ所であった。そのうち津波被害を免れた神社は139カ所、一部浸水した神社は23カ所、被害を受けた神社は53カ所であった。

図-1 大船渡・陸前高田周辺

図-2 北上川河口周辺

図-3 旧北上川下流域周辺

図-4 名取川河口周辺

筆者らは、神社の位置をプロットした津波被災マップをもとに現地踏査を行った。いくつかの例をみると、津波浸水範囲の境界上に多くの神社が位置していることがわかる。たとえば図-1をしてみると、深く入り組んだ湾の地形構造のなかで、海岸段丘上に湾を見下ろすように「1-八坂神社」、「2-加茂神社」、「3-熊野神社」、「7-神坂熊野神社」などが鎮座している。また宮城県石巻市の北上川および旧北上川の河口付近では、津波が川を上流に遡上していった形跡がみてとれる。その遡上範囲を縁取るように神社が点在している(図-2, 3)。現地調査を行うと、これらの地域では丘陵上に多くの神社が位置していることから津波被害を免れたということがわかる。言い換えれば、昔の人びとは、津波や洪水の被害を受けないように、高台の安全な場所に神社を配置していたのだと考えられる。

沿岸部に丘陵がなく、平地が広がる名取川河口から亘理・山元町までのエリアでは、多くの神社が浸水していた。一方で、図-4の「173-浪分神社」、「176-八坂神社」、「183-八幡神社」、「184-天満天神社」のように、平地における津波浸水エリアの境界付近にいくつか神社が存在している。

仙台市若林区の「173-浪分神社」は、もともとは稻荷神社であったが、元禄の時代以降に、襲来した大津波を白馬に乗った海神が南北に二分して鎮めたという伝承から津波鎮撫の霊力信仰が高まり、「浪分」という名前がつけられた。この伝承の背景にあるのは、貞観、慶長、天保などの時代にこの地区を襲来し、多くの犠牲者を出した大津波である。浪分神社内の由緒では、白馬に乗った海神の伝承は、大津波が襲来した天保の頃に成立したことを伝えている。このようなことから、伝統的地域社会において、神社の空間的配置と津波を含んだ自然災害との間に深い関連性があることがうかがえる。

3. 祭神と神社の空間的配置に着目した考察

沿岸部に位置する神社のなかでは、津波が直撃し崩壊したものも少なくない。津波被害を免れた神社とそうでない神社ではどのような違いがあるのだろうか。本章では、神社の配置のリスク・マネジメント上における重要な要素について考察するために、神社の祭神および由緒等を文献により調査し、整理した。

祭神に注目するのは、神によってそれぞれが異なるご利益・神徳をもっているからである。つまり神社がどのような神を祀っているかによって、人びとが歴史的にその地域空間にどのような関心を抱いていたかということを経験できる。また、由緒を調べることで、その神社がたどってきた経緯を、より具体的に知ることができる。これらの要素を総合的にふまえることで、その神社が伝統的地域社会のなかでどのような意味をもっていたかということについて考察する。

祭神の特定については、文献資料^{7), 8), 9), 10), 11), 12)}を用いた。これらの資料を参照しながら、適宜現地調査を行い該当神社の祭神を特定した。また文献資料から祭神の特定が困難なものに関しては、神社名から代表的な祭神を推察した。神社の被災状況の一覧表については、神社名と所在地、および被災状況を明記した。被災状況に関しては、被災を免れたものは○、一部被害があったものは△、被災したものを×で示した。

(1) スサノオを祀った神社

被災を免れた神社にはどのような特徴があったのだろうか。本研究で着目したのは、スサノオノミコトを祀った神社である。その理由は、スサノオが水と災害にかかわる神だと考えられるからである。スサノオは古事記でヤマタノオロチを退治した神として知られている。ヤマタノオロチは、出雲の国を流れる斐伊川をイメージしたもの¹³⁾であり、この斐伊川をおさえることとは、つまりスサノオが治水に関する神徳をもつということである。

スサノオは、古代に大陸から伝わった疫病の神である牛頭天王と同一視されている¹⁴⁾。スサノオは祇園の神であり、京都の八坂神社における祇園祭は、貞観年間に流行した疫病を鎮めるために始まった¹⁵⁾。これらのことから、スサノオは水による直接的な被害だけでなく、その後発生しうる伝染病についてもかかわる神だと考えることができる。水をコントロールする力をもつこととは、すなわち洪水や渇水を引き起こす力をもっており、また水害後に懸念される疫病に対しても何らかの役割をはたすということを意味する¹⁶⁾。

神社名からスサノオを祀っていると推察できる神社は、八坂、八雲、八重垣、須賀である¹⁷⁾。また、御崎神社も日本武尊、大綿津見とともにスサノオを合祀している。

調査対象地のなかのこれらの神社における被災状況の一覧を表-1に示す。スサノオを祀っていると考えられる神社は合計で17カ所あった。そのうちの多くの社は段丘上に鎮座していた。たとえば「27-八坂神社」は、湾のごく近くに位置しながら小高い海岸段丘上に鎮座していたため津波の被害を免れていた(図-5)。スサノオを祀った神社のうち、津波の被害を受けたのは、亶理郡山元町の

表-1 スサノオを祀った神社の一覧

番号	神社名	創建年	所在地	津波被害状況
1	八坂神社		岩手県大船渡市大船渡町猪頭	○
9	八坂神社		岩手県陸前高田市米崎町和方	△
27	八坂神社		岩手県陸前高田市気仙町双六	○
30	御崎神社		宮城県気仙沼市唐桑町崎浜	○
33	八雲神社		宮城県気仙沼市赤岩牧沢	○
40	須賀神社		宮城県気仙沼市本吉町山谷	○
64	八雲神社		宮城県石巻市福地国土	△
80	八雲神社		宮城県石巻市中野大屋敷	○
84	八雲神社		宮城県石巻市雄勝町分浜波板	○
85	八雲神社		宮城県牡鹿郡女川町指ヶ浜指ヶ浜	○
133	八雲神社		宮城県石巻市鹿又町浦	○
139	八雲神社		宮城県石巻市須江館	○
147	須賀神社	1189	宮城県東松島市赤井照井中	○
150	須賀神社		宮城県東松島市西福田古堂	○
176	八坂神社		宮城県仙台市若林区今泉	○
194	八雲神社		宮城県亶理郡亶理町達限牛袋天王	○
208	八重垣神社	1409	宮城県亶理郡山元町高瀬堂野	×

図-5 被害を免れた「27-八坂神社」からのながめ

図-6 被災した「208-八重垣神社」

「208 - 八重垣神社」の1カ所だけであった(図-6)。なお、石巻市中野にある「80-八雲神社」については、防災地図上では被災したようになっていたが、現地調査を行ったところ無事であったことが確認できた。

筆者らは、被災した「208 - 八重垣神社」について現地調査を行った。他のスサノオ系神社が丘陵上に建っているのに対して、八重垣神社は山元町の海沿いの平地に位置していた。しかし、この神社の所在地名が「高瀬」という字名であることから、海岸沿いの平地のなかの微高地であることが読み取れる。そのことを裏付けるように、現地で地域住民にヒアリングを行ったところ、八重垣神社では津波が正面からの津波は免れたものの、両側の低地から神社を挟みこむように水が襲ってきたという。この八重垣神社は、海岸線から丘陵までの距離が長く、平場が広い亶理山元町沿岸部において、そのなかでも比較的水害を回避しうる場所が選定されていたと推測できる。

以上のように、スサノオを祀った神社のほとんどが津波の被害を免れていた。その背景としては、水害や疫病に対する神徳をもつスサノオノミコトは、いわば非常時、リスク時の神であり、伝統的地域社会において人びとは、スサノオを祀った社を自然災害発生時にも安全な場所に建てていたことが考えられる。

(2) 熊野系神社

次に着目したのが「熊野」の名をもつ神社である。調査対象地の熊野神社とその被災状況を表-2に示す。熊野の名がつく神社は合計で11カ所あった。そのなかで、一部被害を受けたものが1カ所あるだけで、他はすべて津波被害を免れている。

現地調査を行ったなかで興味深かったのは、岩手県・大船渡市の「7-神坂熊野神社」である(図-7, 8)。神坂熊野神社は、大船渡湾に向かって細長く伸びた丘の上に位置していた。神社から坂を下りたところまで津波が押し寄せ、丘陵下にあった家が被害を受けた。付近の住民によると、神社付近の浸水したエリアは、比較的新しくて

表-2 熊野系神社の一覧

番号	神社名	創建年	所在地	津波被害状況
3	熊野神社		岩手県大船渡市大船渡町猪頭	○
7	神坂熊野神社		岩手県大船渡市末崎町神坂	○
18	熊野神社		岩手県大船渡市末崎町中森	○
26	熊野神社		岩手県陸前高田市小友町矢の浦	○
58	熊野神社		宮城県石巻市北上町十三浜吉浜	○
81	熊野神社	1494	宮城県石巻市中野台下	○
88	熊野神社		宮城県牡鹿郡女川町石浜高森	△
95	熊野神社		宮城県石巻市鮎川浜伊勢下	○
98	熊野神社		宮城県石巻市網地浜網地	○
125	熊野神社		宮城県石巻市渡波早坂山	○
211	熊野神社		福島県相馬郡新地町埴木崎熊野	○

きた住宅街であるという。神社の表参道は古い集落の方を向いており、やはりその集落に津波は到達していなかった。また、神坂熊野神社は地震発生後に避難所として機能した。

「熊野信仰」は、和歌山県の熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社の「熊野三山」を総本社とする信仰である。熊野三山に祀られる神は「熊野権現」とよばれ、この神を祀る熊野神社は全国に無数に存在する。熊野詣でとは、熊野三山に参詣することであり、平安時代中期に院・宮をはじめ、権門勢家の間で信仰が広まっていった¹⁸⁾。東北地方においても、平安末期には藤原秀衡が平泉に新熊野神社を創建するなど、古くから熊野信仰が浸透していたことが知られる。鎌倉・南北朝以前にできた熊野神社は陸奥国のなかだけで9社¹⁹⁾を数えており、奥州藤原氏と熊野信仰との強い結びつきが感じられる。また、熊野神社の全国分布をみると、東日本に際だってその数が多いことが「熊野三山信仰辞典」で指摘されている²⁰⁾。

この熊野信仰は出雲やスサノオと関連深いとの見方がある。島根県松江市八雲町には熊野大社という神社があり、やはりスサノオを祀っている。また、熊野三山のう

ちの熊野本宮大社、熊野速玉大社は、ともに出雲族の移住により、出雲の熊野の神を遷祀したものという説²¹⁾がある。特に、熊野本宮大社の主祭神である家津御子神はスサノオと同一視されている²²⁾。

また、熊野はその本社が「三山」と呼ばれることからわかるように、地形との関係を考えた場合、「山」と深いかかわりにある。熊野信仰のルーツとして考えられる出雲にも熊野山という山があり、前述した出雲・熊野大社はもともとその山上付近に鎮座していたといわれている²³⁾。熊野の語源は「隈野(クマノ)」であり、「隈(クマ)」は「奥まった所」という意味である²³⁾。一方で、東北における熊野信仰は、紀伊熊野の地を拠点に、海上ルートから伝播してきたとする説がある²⁴⁾。そのため、海沿いにも多くの熊野神社をみることができる。

これらのことを総合して考えると、熊野神社が海岸沿いに建てられる場合にも、水際の低地ではなく、海岸線からやや奥まった場所か、あるいは山として見立てることができる丘陵の上が選ばれていたと考えられる。東北において熊野神社が津波被害を免れた理由としては、以上のようなことが推察できる。

(3) 八幡系神社

スサノオ系、熊野系の他に被災を免れたのは八幡神社である。調査対象地に八幡系神社は24カ所あり、そのうちで津波を免れたのは18カ所、被災したのは6カ所であった(表-3)。

表-3 八幡系神社の一覧

番号	神社名	創建年	所在地	津波被害状況
20	八幡神社		岩手県大船渡市末崎町高清水	○
34	八幡神社		宮城県気仙沼市松崎中瀬	○
38	八幡神社		宮城県気仙沼市本吉町日門	○
43	旭岡八幡神社	801	宮城県本吉郡南三陸町歌津田の浦	○
48	八幡神社		宮城県本吉郡南三陸町歌津板橋	×
105	八幡神社		宮城県石巻市谷川浜大谷川道山	×
116	八幡神社		宮城県石巻市水沼天似	○
117	八幡神社		宮城県石巻市高木若宮	○
120	八幡神社		宮城県石巻市沼津出外	○
128	八幡神社		宮城県石巻市井内八幡山	○
129	八幡神社		宮城県石巻市大瓜八津山	○
131	八幡神社		宮城県石巻市南境妙見	○
134	八幡神社	建久年間 (1190~1199)	宮城県石巻市鹿又天王前	○
136	八幡神社		宮城県石巻市小船越町屋	○
141	八幡神社		宮城県石巻市蛇田土和田山	○
144	赤井八幡神社	1065	宮城県東松島市赤井館前	○
148	八幡神社		宮城県東松島市小松小松台	○
153	八幡神社		宮城県東松島市根古湯舟	○
174	八幡神社		宮城県仙台市若林区荒浜石場	×
178	八幡神社		宮城県仙台市若林区井土砂崩	×
182	八幡神社		宮城県名取市牛野八幡	×
183	八幡神社		宮城県名取市大曲八幡	○
195	八幡神社		宮城県亶理郡亶理町達隈中泉町裏	○
201	八幡神社		宮城県亶理郡亶理町達隈高屋高下	×

図-7 「7神坂熊野神社」周辺の浸水状況

図-8 「7神坂熊野神社」からのながめ

八幡神社に祀られる八幡神は、もともと大分は宇佐の豪族である宇佐氏の氏神だったと考えられている。この神が、大和朝廷との関係のなかでやがて「誉田別尊」と応神天皇と同一視されるようになった²⁹⁾。八幡神はやがて、武神、護国神として広く人びとの信仰を集めていった²⁹⁾。

応神天皇は、大陸の文化や技術の導入で知られている。また、八幡神のルーツの地である大分・宇佐は新羅との関係が深い土地であり、古代において、渡来人たちが大陸の先進的な文化や技術を多くもたらした²⁷⁾。すなわち、八幡神社と大陸から渡ってきた先進的な技術との間に重要な関係性をみることができる。このことをふまえて多くの八幡神社が津波被害を免れたことの理由について一つの仮説を述べるならば、農業用インフラ、たとえば、農業用水路、農業用ため池などの近く、あるいは港湾を見下ろす高台などに、鎮守の社として地域社会の重要な場所に鎮座し、それらの守り神であったことが想定される。竹石は、八幡神が武神としての性格以外に、村の鎮守、身近な庶民の神として親しまれてきたと指摘している²⁸⁾。

また「144赤井八幡神社」は、その由緒によれば、源頼義父子が奥州へ戦争に赴いた際、陣中において八幡神を勧請し、勝利を祈願したことに起因するとしている。したがって武神としての性格をもつ八幡神は、戦いにおける要所としての地域のインフラや交通の要となる場所を選定したとも考えられる。

このような点から八幡神社は、地域のインフラの守り神として、それにふさわしいロケーションに勧請されたことが想定される。このことが多くの八幡社が被災を免れたことのひとつの理由として推測できる。

(4) 被災した神社

最後に、被災した神社について、祭神との関係をみてもみる。調査対象215カ所の神社のうち、被災したのは53カ所であった。

そのなかで多くが被災したのは稲荷系の神社(表-4)であった。調査対象の全11カ所中で5カ所が被害を受け、さらに2カ所は一部被害があった。稲荷神社は基本的に倉稲魂命(うかのみたま)を祀っている。倉稲魂命という名は、倉の中に収められた稲の霊魂を示しており²⁹⁾、つまり稲や食物にかかわる神である。「いなり」という言葉は「稲成り」が転訛したことに始まるとされている³⁰⁾。

穀物の神として祀られる稲荷神は、稲作に関係する場所、すなわち農地などに祀られる。古代の農地は、湿地などを利用して耕作されていたことから、当然、稲荷の社もそのような場所に多く見ることができる。

稲荷神は屋敷神としての性格をもつことから、もともとその社は全国各地において、農地から街中までいたる

表-4 稲荷系神社の一覧

番号	神社名	創建年	所在地	津波被害状況
22	稲荷神社		岩手県陸前高田市小友町唯出	×
45	白鳥稲荷		宮城県本吉郡南三陸町歌津長沢	○
47	稲荷神社		宮城県本吉郡南三陸町歌津峰畑	△
57	稲荷神社		宮城県石巻市北上町十三浜立神	○
65	稲荷神社		宮城県石巻市北上町長尾小長尾	○
109	正一位稲荷神社		宮城県石巻市狐崎浜家ノ上	○
110	稲荷神社		宮城県石巻市待浜西畑	△
142	稲荷神社		宮城県石巻市門脇元明神	×
152	稲荷神社		宮城県東松島市大曲上台	×
185	稲荷神社		宮城県岩沼市下野郷浜	×
207	青葉稲荷		宮城県亶理郡山元町山寺浜	×

表-5 アマテラスを祀った神社の一覧

番号	神社名	創建年	所在地	津波被害状況
46	五十鈴神社		宮城県本吉郡南三陸町歌津馬場	×
53	五十鈴神社		宮城県石巻市北上町十三浜大指	×
78	五十鈴神社		宮城県石巻市雄勝町熊沢熊沢	○
83	五十鈴神社		宮城県石巻市雄勝町分浜分浜	○
96	五十鈴神社		宮城県石巻市小淵浜入の沢	○
99	神明宮		宮城県牡鹿郡女川町塚浜塚浜	△
103	五十鈴神社		宮城県牡鹿郡女川町野々浜野々浜	×
106	五十鈴神社		宮城県石巻市小積浜小積山	○
119	天照皇宮		宮城県石巻市真野小島	○
132	五十鈴神社		宮城県石巻市鹿又町浦	○
145	五十鈴神社		宮城県東松島市大曲寺沼	×
146	五十鈴神社		宮城県東松島市大曲小脇浦	×
155	五十鈴神社		宮城県東松島市浅井高田	○
171	天照大神宮		宮城県仙台市宮城野区蒲生八郎兵工谷地第一	○
179	五柱神社	1060	宮城県仙台市若林区藤塚屋敷	×
188	神明社		宮城県岩沼市押分須加原	×
189	神明神社		宮城県岩沼市早股前川	×
191	神明社		宮城県岩沼市寺島浜里	×

ところに鎮座している。つまり人びとにとってはごく身近な神であり、また生活空間の様々な場面で目にすることができるといった。いわば平常時に神徳を発揮する神である。そのため、災害時を想定してお宮を建てる場所を厳選するというよりは、人びとにとって身近な場所が選ばれていた可能性がある。このようなことが稲荷神社の多くが被災した理由としてあげられる。

祭神の神徳との関係は定かではないものの、被災した割合が最も多かったのはアマテラスオオミカミを祀った神社で、合計18カ所中で9カ所が被災し、1カ所が一部被害を受けた(表-5)。およそ半分が津波の被害を受けたことになる。アマテラスは伊勢神宮に祀られる神であり、太陽の象徴であるとされている。古事記では「天照大御神」と表記され、「天照」は「天にあって照り輝く」という意味である。この「天照」は「大御神」を修飾する語である。すなわちこの神の名は、「照り輝くばかりに立派で偉大な神々しい神」という意味をもっており³¹⁾、古事記、日本書紀では、高天原を統べる至上神として位置付けられている。また、皇室の祖としての神、つまり

皇祖神としての性格をもつ。

アマテラスを祀った神社の多くが被災したことの理由については定かではないが、ここでは調査の結果として、アマテラス系神社の多くが津波の被害を受けたことを示しておきたい。

4. おわりに

本研究では、東日本大震災後の津波の被害状況と神社との関係を調査し、スサノオノミコトを祀った神社、熊野系の神社、および八幡系の神社の多くが津波の被害を免れていることを示した。特にスサノオは治水と疫病にかかわる神であり、伝統的地域社会において人びとは、洪水や津波等の自然災害を回避しうる場所を選定し、スサノオを祀る神社を配していたと考えることができる。逆に、アマテラスを祀る神社や稲荷系神社は、多くが津波の被害を受けていたことも明らかになった。

本研究によって得られた知見は、東日本大震災の復興プロセスおよびその他の地域づくり活動等において、リスク・マネジメント方策の検討に重要な方向性を示すものと考えられる。たとえば、津波が襲来する可能性のある地域において、神社の空間的配置とその祭神を調査したうえで、津波発生時の適切な避難経路や避難場所を検討することが可能となる。また、神社空間のもつ防災上の意味をふまえて、神社空間における祭りなどのイベントを通して、平常時から地域の防災意識を高めるような方策も検討できる。

一方で課題も多くある。震災後に深刻な問題として顕在化したのは、避難所として機能するなど地域の人びとにとって公共的役割を担っていた寺院や神社などが、政教分離の考えから公的な支援を受けることができないというケースである。被災した施設に関しても、公的支援を受けることができず、復旧復興がなかなか進まないという問題が生じている³⁹⁾。

筆者らが現地調査を行った際、集落によって管理されてきたある神社は、津波による被害は免れたものの、地震によって社が激しく損傷していた。地域住民の話によれば、社を修繕するための資金が集落にはないため、取り壊すことが決定したと語った。このことは、リスク・マネジメントにおいて重要な役割を果たしうる空間が地域の人びとの意識から消えていく可能性を示唆する。重要な課題となっているのは、長期的な時間軸から自然災害の歴史を伝え、かつ地域の防災拠点として機能しうる神社空間をどのように維持し、また地域マネジメントを実施するうえでどのようにしてその意味を、地域住民や行政機関などの多様な主体間で共有していくかということである。

神社空間が大規模自然災害のリスク・マネジメントにおいて重要な意味をもつのは、祭事などを通して地域の人びとの意識と記憶に深く根ざす可能性があるからである。今後は、地域づくり、また自然災害の防災にかかわる公共政策のなかで、神社などの文化的・宗教空間をどのように位置づけていくかということを検討しなければならない。また、伝統的にコミュニティの中心に位置し、地域社会の精神的支柱となってきた神社等の空間を、地域の重要な共有資源として捉えなおすことが求められている。

謝辞：本研究は、東京工業大学大学院社会理工学研究科による「経済社会研究プロジェクト」のなかの「災害リスク・ソリューションに関する体系的研究2011」による研究資金で実施した。関係者の皆様に深く感謝の意を述べたい。

参考文献

- 1) 桑子敏雄：環境の哲学，講談社学術文庫，1999.
- 2) 桑子敏雄(編)：日本文化の空間学，東信堂，2008.
- 3) 宇多高明，酒井和也：2011年の大津波による海岸災害と被災を免れた神社，PWRC なぎさ総合研究室，2011.
- 4) 東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)神社情報特設ページ(<http://www.jinja.ne.jp/quake/>).
- 5) 日本地理学会災害対応本部津波被災マップ作成チーム：2011年3月11日東北地方太平洋沖地震に伴う津波被災マップ.
- 6) 東日本大震災復興支援地図，昭文社，2011.7.
- 7) 西宮一民(校注)：古事記，新潮社，1979.
- 8) 坂本太郎，家永三郎，井上光貞，大野晋(校注)：日本書紀一全五巻一，岩波文庫，1994.
- 9) 三浦謙(編纂)：全国神社名鑑一上巻一，全国神社名鑑刊行会史学センター，1977.
- 10) 三橋健，白山芳太郎(編著)：日本神さま辞典，大法輪閣，2005.
- 11) 小池長之：日本の神々，学芸図書，1968.
- 12) 瓜生中：知っておきたい日本の神様，角川ソフィア文庫，2010.
- 13) 前掲7，p.54.
- 14) 川村湊：牛頭天王と蘇民将来伝説，作品社，2007.
- 15) 真弓常忠：祇園信仰－神道信仰の多様性－，朱鷺書房，2000.
- 16) 桑子敏雄：「空間の履歴」から読みかえる環境思想－「安全神話」の真実－，In 日本の環境思想の其層－人文知からの問い－(秋道智彌編著)，岩波書店，pp.24-46，2012.
- 17) 川口謙二(編著)：日本神祇由来辞典，柏書房，pp.157-158，1993.
- 18) 加藤隆久(編著)：熊野三山信仰辞典，戎光祥出版，p.38，1998.
- 19) 石巻市史編さん委員会：石巻の歴史－第一巻通史編(上)－，石巻市，p.430，1996.
- 20) 前掲18，p.120.

- 21) 星野齊, 本田不二雄, 後藤然, 渡辺裕之, 羽上田昌彦(編集製作): 神道の本—八百万の神々がつどう秘教的祭祀の世界—, 学研, 第2号, pp.80-81, 1992.
- 22) 篠原四郎: 熊野大社, 学生社, p.16, 1969.
- 23) 石塚尊俊: 出雲国神社史の研究, 岩田書院, pp.51-52, 2000.
- 24) 前掲 18, p.120.
- 25) 飯沼賢司: 八幡神とはなにか, 角川選書, 2004.
- 26) 中野幡能(編著): 八幡信仰辞典, 戎光祥出版, 2002.
- 27) 遠日出典: 八幡神と神仏習合, 講談社現代新書, pp.67-74, 2007.
- 28) 竹石たか枝: 八幡信仰と縁起, In 八幡神社—歴史と伝説—(神社と神道研究会編), 勉誠出版, pp.355-361, 2003.
- 29) 前掲 10, p.191.
- 30) 前掲 10, p.190.
- 31) 前掲 10, pp.53-54.
- 32) 産経ニュース記事: 生活優先…神社仏閣進まぬ再建 政教分離 行政の支援得られず, 2011.12.11.

(2012. 7. 27 受付)

A STUDY ON THE DEITY AND SPATIAL ARRANGEMENT OF SHRINES IN TSUNAMI DISASTER CAUSED BY THE TOHOKU EARTHQUAKE

Tomoki TAKADA, Kimio UMETSU and Toshio KUWAKO

The purpose of this study is to discuss the ways of risk management based on the modern significant ancient wisdom for the “community land management” after the 2011 Tohoku earthquake and tsunami in Japan. In this study, we focused on the location of shrines along the coastal area in order to uncover the “profile of space” accumulated in the heart of community. More specifically, a survey about the location of shrines and the damages caused by the tsunami in the coastal area of Miyagi Prefecture showed that many shrines are located at the exact limit flooded area. And by the investigation of the specific deity of each shrines, we discovered a majority of shrines which have roots in Izumo and Hachiman Shrine escaped from the tsunami disaster.